

心囊液中に出現した心臓原発血管肉腫の一例

◎沖田 静流¹⁾、松本 明¹⁾、小嶋 健太¹⁾、吉田 桃子¹⁾
独立行政法人 国立病院機構 九州医療センター¹⁾

<はじめに>

血管肉腫は全肉腫の1%未満、軟部肉腫の1~4%程度とまれな腫瘍で、心臓原発が6.7%を占め、心臓原発の悪性腫瘍の中では最も多いとされる。今回心囊液中に出現した心臓原発血管肉腫を経験したので報告する。

<症例>

70歳代男性。労作時の息切れや胸部圧迫感、呼吸困難感を自覚し前医受診。心囊液貯留を指摘されたため当院受診。CTでは心膜腔内に内部不均一な腫瘍影を認めた。治療・検査目的に心囊ドレナージが施行された。

<細胞像>

出血性背景に異型細胞が集塊状～散在性に出現していた。核は類円形～多角形が主体で、核クロマチンは細顆粒状、明瞭な核小体を認めた。細胞質はライトグリーンに淡染しており、上皮様の集塊や相互封入像、血管軸様の構造を示す細胞も一部にみられた。細胞診断としては悪性とし、鑑別疾患として転移・浸潤癌や悪性中皮腫などが挙げられた。

<組織像>

心囊液のセルブロック標本では核は類円形の異型細胞のびまん性増殖を認め、一部には紡錘形の異型細胞を認めた。免疫組織化学ではCD31、CD34(focal)に陽性、CK7、CK18、TTF-1、calretininに陰性で血管肉腫と診断された。

<まとめ>

血管肉腫の細胞形態は類円形～紡錘形と多彩であり、体腔液中では上皮様の集簇を伴うといわれている。今回の症例では類円形核の異型細胞を主体に上皮様の結合を伴う集塊が出現しており、上皮性腫瘍との鑑別に苦慮したが、心臓原発悪性腫瘍の頻度と体腔液中の血管肉腫の細胞像を理解しておくことで鑑別疾患として挙げることは可能であると考えた。

<連絡先>

国立病院機構 九州医療センター 臨床検査部
Tell 092-852-0700 内線番号：2306